

「克服の始まり」

「先生、なんでクリスチャンなのに、旧約聖書を読まないといけないんですか？ 旧約聖書ってユダヤ教の話なんでしょ」。これは、高校で聖書科を教える友人牧師が受け取った生徒からの質問です。旧約聖書を当たり前のように取り扱う立場からすれば、この質問は考えるまでもない愚かしい戯言と言っても良いかも知れません。でも、私たちの聖書が、「聖書に成った」歴史を振り返ってみると、これはなかなか込み入った話でもあります。主イエス・キリストのことを扱った文書を「聖書」に含めるなら、世の中には、「ペトロによる福音書」とか「ユダによる福音書」という文書もあります。また、世の中に流通している新共同訳聖書の中には「旧約聖書続編」というものを含んだ聖書もあり、日頃ほとんど読むことはない文書が収録されています。「旧約聖書続編」はカトリック教会で扱うものだそうです。プロテスタントの私達を読まないのは、そのためですね。ちなみに、「新共同訳聖書」という名前の「共同」と言うのは、カトリック教会とプロテスタント教会が「共同」で翻訳し、「共同」で使うことを想定した聖書という意味です。

ごめんなさい。話が逸れました。キリスト教信仰に関わる数多の文書が存在する中で、今の聖書が「聖書に成った」歴史について振り返ってみますと、その最初にあったのはマルキオンという思想家による極端な文書選別でした。マルキオンは、ルカによる福音書と、パウロ書簡というパウロさんが書いた手紙の一部しか聖書として認めない、と主張しました。当時のキリスト教界は、このマルキオンの主張に対して、それまでフワッとした輪郭しかなかった「聖書」という概念に、キッパリとした定義を施すことを決めました。「聖書の正典化」という作業を始めました。数ある信仰や福音の記録を精査、選別し、「これこそ聖書だ」という文書を定めていきました。その長い作業

の先に出来上がったのが、今、私たちが持っている「聖書」です。・・・見方によっては聖書とは人が定めたものでもあり、一方では、偽の書物と書いて「偽書」を排除したり、偽の教典と書いて「偽典」を見分けたりする、祈りを伴った非常に信仰的営みの先に、「これこそ聖書だ」という確認に至ったということでもあります。現代を生きる私たちも、信仰について書かれた本は全て正しい、とは思わないでしょう。自分の持っている教えや経験に基づいて、信仰の本の取捨選択をしているはずです。それと同じことが聖書成立の背景にあったということです。

新約聖書の一部しか認めないと主張したマルキオンの考え方は、否定されました。神様の御言葉は、人間が思う程に単純ではなく、非常に長大であり、嫌になるほど複雑なんだ、ということを当時の教会は認めたのです。合理的とか、分かり易いことを正義とする感覚からは程遠い、とても謙虚な判断だと私は思います。難しくても読むんだ、分からなくても無視しないんだ、という姿勢は、今の時代、ある意味とても貴重なのかも知れません。当時の教会の、そのような発想、判断によって、今の私達の手元には、非常に分厚く、長たらしく、そして難解な聖書が残されました。そのことを素直に感謝すべきか、どうかは分かりませんが、お陰で、私たちは日常生活では触れられない、深い世界観と、斬新な視点、豊かな感情や将来への希望を読むことができます。

イエス様が十字架で死ぬことを心に留める日々。受難節を過ごす今の私達にとって、イエス様とは直接関係しない長たらしい旧約聖書の文書は、どのような意味を持つのでしょうか。そんな視点から、ちょっと今日の聖書箇所を読んでみたいと思います。

まず重要なことは、イエス様が御受難の道を歩まれている時、イエス様の近くいた人達は、みんな旧約聖書のことを良く知っていたんだ、ということです。今を生きる私たち以上に旧約聖書に精通していたでしょう。そして、今日の聖書箇所である、イザヤ書についても憶えていたはず。むしろ、イエス様の御受難を間近に見て、その深刻さが増す中で、より一層、希望の御言葉を探してい

たはずです。だから、心の内に唱えたことでしょう、「雄々しくあれ、恐れるな。見よ、あなたたちの神を」と。イエス様が十字架へと進まれる時に、なおイエス様の正しさと神の子としての權威を疑わなかった人たちは、世の不条理に嘆いて、ただただ目の前の現実には慄いていただけではなかったはずです。だって、信仰者ですから。旧約聖書の御言葉を知り、イエス様に付き従った立派な信仰者だったのだから、その心の中には、悲しみや怯えと同時に、それでも消えることのない御言葉への信頼、神様への信仰があったはずです。

確かに、御受難の出来事において、逃げ去っていった弟子たちの姿がありました。私達の教会でも、そんな弟子たちの姿に触れながら、人の弱さと、その弱さを覆う神様の愛について、よく学んでいます。けれど、その理解の仕方は、半分正解で、半分間違っていると私は思います。きっといたんです、イエス様が苦しみを受けられる中で、十字架へと至る道を進まれる中で、なお旧約聖書の希望の御言葉を忘れなかった人たちは。「弱った手に力を込め、よろめく膝を強くせよ。心おののく人に言え。『雄々しくあれ、恐れるな。見よ、あなたたちの神を。敵を打ち、悪に報いる神が来られる。神は来て、あなたたちを救われる』」。自らの信じる神の御子が逮捕され、尋問され、磔にされようとしている時。だからこそ、思い浮かぶ御言葉ってあると思います。絶望の時にこそ、思い出され、励みになり、「でも、この後きっとすべてが良くなる」と信じるためにこそ、私たちには御言葉が与えられているはずです。イエス様の御受難においても、そのような御言葉を探し求め、心の中で呟いた信仰者は、きっといたはずです。

そして、そういう歴史的事実が否定できないからこそ、今の私達も旧約聖書を読んでいるんだと思います。新約聖書に登場する人々が、折に触れて、苦しみや悲しみの時にこそ思い出したであろう古い約束の言葉に、大きな慰めと価値があると認めて。私達は旧約聖書の御言葉を今でも読んでいます。

ところで、「主の御受難の時にも、旧約聖書の御言葉は励ましになったはず」という考え方は、逆を言えば、主の御受難の時に、信仰者であったにも関わらず、右往左往して逃げ去った弟子たちの姿を、悪い意味で目立たせるものです。「君らって、旧約聖書に詳しくて、一番、信仰深いはずじゃなかったの？」という。旧約聖書の御言葉にも精通し、誰よりもイエス様の近くにおり、信仰深いという点で何ら欠けの無かったはずの弟子たちが、にも関わらず、逃げた。

でも、そうだとするなら、より一層「神様の赦し」を感じられますよね。イエス様の優しさが沁みますよね。「あんだけ聖書の勉強して、神様の御心を受け入れられないなんて、弱い信仰だね」って思うこともあるかも知れませんが、まさにそんな「弱い信仰」の人を認め、赦し、なお用いようとされた、と言うのが受難節と復活節のメインテーマなのかも知れません。主の御受難によって浮き彫りにされた信仰の弱さ。でも、その事実を踏み越えて実現した赦しと選び。

私達は、まだ受難節を過ごしているので、希望の福音は、もうちょっとお預けにしておきます。しかし、「そのとき、見えない人の目が開き、聞こえない人の耳が開く」という預言は、主の御受難によって炙り出された「弱い信仰」の人のことを指しているのかも知れません。もしも、今、自分の信仰や神様、イエス様への思いにブレを感じている方がいらっしゃるなら、それはイースターに向けて順調に過ごしている徴だと言えるでしょう。受難節は、震えて縮こまる期間ではありません。自らの至らなさ、罪深さを振り返りつつ、でも、赦しと救いを信じて、「雄々しくあれ、恐れるな」という励ましを再確認する期間です。自分の弱さ、自信の無さ、将来への不安、教会の行く末を案じるなら、なおのこと、躍り上がり、喜び歌う未来を見据えて、この受難節を過ごして参りましょう。お祈りを致します。

神様。

今日も、私たちは受難節の聖日を過ごしています。イエス様が苦しまれた出来事、その背後にもあなたの御心があった事実を受け止めつつ、人の想いを超えた御計画を前に、私たちは心を騒がせることがあります。私達の日々の生活においても、悲しいことや、苦しいことが起こります。それらには、きっとあなたの御計画があることも知っています。しかし、目の前の現実から逃げ出したいくなる、私たちがいます。主の御受難を前にして、なお聖書の御言葉を忘れなかった人たちのように、私たちの信仰を強めてください。また、もしも私たちが苦難から逃げ去ったとしても、なお見捨てず、再びこの場所へと連れ戻してください。ともにイースターの喜びを分かち合えるように、私たちの信仰と歩むべき道を備え、力づけてください。

このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。